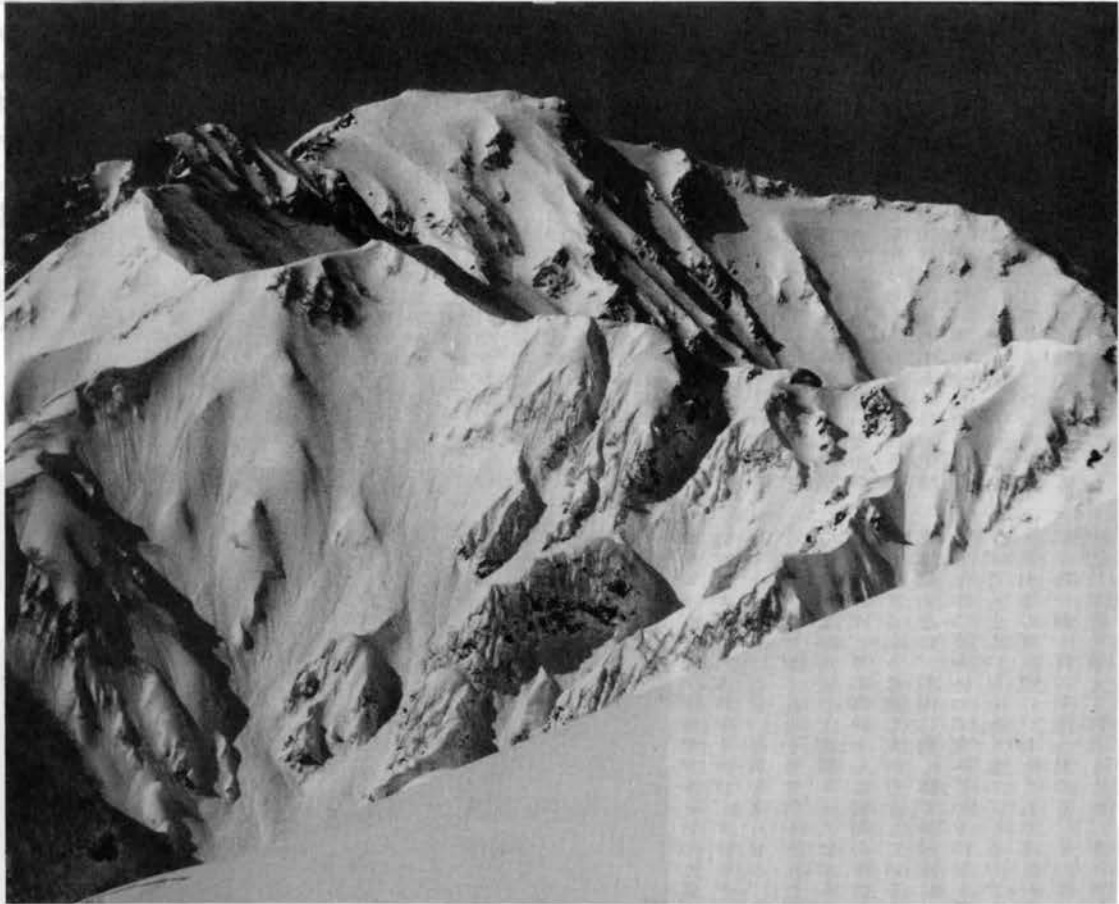


山と博物館

第38巻 第2号 1993年2月25日

大町山岳博物館



厳冬の五竜岳

私の夢 写真と文 金沢正三

山が近く、毎日眺められる。スキー場に近い。山の写真が撮れる。山に魅せられている私が大町に移り住んだ最大の理由である。それだけに私には、山岳博物館(山博)はかくあって欲しいという夢物語がある。以下列挙してみたい。

一つは山博別館を大町駅前を作る。屋上つきの三階建てとし、一階には喫茶室、名産品の売店、おみやげや松崎和紙の製造実演場も設置する。二階は写真展会場、三階は絵画展会場とし、屋上は昼間は北アルプスの展望台、明る過ぎて星が見えなければ仕方ないが、夜は天体観測台とする。そして山博まで直行のゴンドラを設置する。

二つには山博とその周辺の整備である。山博内に、北アルプスの山々を紹介するビデオコーナーと案内板を作り、ボタンを押せばいつでも誰でも見られるようにする。壁面に岩登りの練習ルートを作るのもよい。また、足の弱い人のためにも、山博から鷹狩山の頂上までゴンドラか地下ケーブルを設置する。

三つには金のかからない事だが、全国から参加者を募って、隣接する長野県山岳総合センターと共同で、夏冬を通じてのテント生活実習を行う。また、大町(バス)→相川トンネル→唐花見湿原→鷹狩山→山博のコースで、無雪期のハイキングを開催する。もし天候が悪い時は、山博別館も含めた博物館巡りをしてはどうだろう。

積雪期、鷹狩山の頂上から山博までスキー滑降が可能である。そこで最後の夢はスキー場である。伐採した部分を見ると、地形的には造成できると思うが、スノーマシンは必要だろう。このスキー場では、ブルックポイントンさえできれば誰でも充分に楽しめる。しかも途中の雪の多いところでは、イグルーや雪洞の練習も可能である。ワカンやアイゼンワークにも良いゲレンデになるに違いない。

巨万の富が私にあったら、今すぐにも投資するのだが……。

(大町市在住)

ツキノワグマの生活

羽澄 俊裕

一九八七年の夏、東京農大の北原正宣先生のお誘いで、北アルプスのライチョウ調査に参加させていただくことになった。いささか不謹慎ではあるが、ライチョウ調査にもかかわらず、僕の興味は「クマもよく見れますよ」という先生の一言にあった。そしてその時の経験は僕のクマを見る目を一新したのである。おそらくこの時の経験によって初めてクマという動物を正しくイメージできるようになったと思う。

僕はそれまで栃木県の日光連山のミズナラ林で八年近くツキノワグマを追ってきた。とにかくこの地域に生息するクマを追いかけて、その生態を知ること頭がいっぱいだった。また、ツキノワグマというトナリ林というイメージが一般に浸透しすぎていたため、アルプスの高山帯を利用するツキノワグマというものがかつくりこなかった。また、高山帯的環境は北米のグリズリー(ヒグマ)のイメージであり、ツキノワグマは森林棲というところにこだわりすぎていた。

高山帯のツキノワグマの食性

天然記念物ライチョウは、高山帯のハイマツの間に巣を作って暮らす。そのため、調査は標高三千m前後の稜線近くの斜面を、数人でベルトトランセクト方式で歩きながら個体や痕跡の確認をしていくものである。もちろん

丸国立公園の第一級の保護区域であるから、天然記念物の調査という大きな目的でもなければ、本来環境庁もそこへの出入りを許可しない地域である。そしてそうした人を遠ざけた地域であるがゆえに、野生の息吹も色濃いものとなる。カモシカと鉢合わせになった。霧の切れ目にハイマツの中からクマの親子が姿を現わした。そして、雪渓のきわには、ひとつが1kgもありそうな大きなクマのフンがいくつも落ちていた。ビニール袋ごとにつかんだその真っ黒なフンは、草本類の長い茎とその繊維が未消化のまま絡まっていた。

春のツキノワグマは草本類をよく利用する。とくに雪深い地方では、春から初夏にかけて山菜採りに出かけるとクマのフンだらけだったという話をよく聞く。植物はこの頃地中からたくさん栄養を吸い上げて、若い芽をぐんぐん成長させていく。そのため、この時期の植物に含まれる栄養価はぐんと高くなる。だからクマは非常に効率良い食物を利用してると解釈することができる。ところで、真夏の高山帯の雪渓のまわりは雪田植物の宝庫である。そして、雪が少しずつ溶けるのに合わせるように、そのわきから新しい草本の若芽が頭をもたげてくる。ひよっとすると高山帯のツキノワグマは他のどこよりも安定して効率よい食物を利用しているのかもしれないのである。そしてまた短い夏の間、



雪渓と雪田植生

コケモモ、アオノツガザクラといった風衝わ性低木類やベニバナイチゴ、クマイチゴといったノイチゴが甘い果実を実らせる。大きな図体のクマがこんな小さな実をどんな顔をして食べているのかと想像するだけでもおかしくなるが、その痕跡からは植物の本体を一つに思えない。器用に動く唇で神経質にひとつひとつつまみとって食べているのかと思う。高山帯の夏は短い。およそ五カ月という間に生物が精一杯の循環を見せる。その間に集中的に栄養を蓄え、初雪とともにさっさと穴にこもってしまったら、ここを利用するクマ

達は、わざわざ他の地域へ出かけて行くこともなく、一生を終えられるのかもしれない。本当にそうだとしたら、なんと平和で穏やかなことだろう。人里近く暮らし、柿の木に登ったばかりに殺される各地の多くのクマのことを思うたびに、アルプスのクマがなんと幸せ者に見えてくる。

雑食性と分布

クマは雑食化することによって、地球上に広く分布を拡大した。北海道に生息するヒグマの仲間も、その中でもっとも分布を拡大した。ヨーロッパのブナ帯地域からチベットの砂漠地帯、そしてシベリア極地方にいたるユーラシア大陸のほとんどを網羅し、北米大陸をかつてはメキシコあたりまで生息していたのである。ただし残念なことに、人間の文明の繁栄とともに多くの地域で絶滅し、分布後退の一途をたどってきた。日本の本州以南に分布するツキノワグマの仲間も、ヒグマ同様広く分布を拡大してきた種である。台湾にも生息するし、ユーラシア大陸のシベリア地方から朝鮮半島、そして、中国南部雲南省、インドシナ半島の北部、ヒマラヤ地方にまで生息すると考えられている。

緯度だけで生息環境を代表させるわけにはいかないが、ヒグマが温帯から極地方の間にベルト状に分布するのに対し、ツキノワグマの分布は緯度の幅が非常に広い。それぞれの国のツキノワグマに関する生態的情報は、非常に漠然としたものなのでなんとも言えないが、寒いところから暑い地方まで生き残ることができた理由は、肉食動物から分化したにもかかわらず雑食化を達成し、むしろ植物へ

フ	ン	内	容	物	部	位	出	現	頻	度	容	量	選	択	指	数
							(数)	(%)								
木	本	類														
	マ	ツ	科	ハイマツ (<i>Pinus pumila</i>)	leaf		5	22.7	1.0	22.7						
	ツ	ツ	ジ	科	ミネズオウ (<i>Loiseleuria procumbens</i>)	"	1	4.5	1.0	4.5						
					アオノツガザクラ (<i>Phyllodoce aleutica</i>)	"	1	4.5	1.0	4.5						
					コケモモ (<i>Vaccinium vitis-idaea</i>)	"	5	22.7	1.0	22.7						
	ウ	コ	ギ	科	ハリブキ (<i>Oplopanax japonicus</i>)	"	1	4.5	2.0	9.0						
	バ	ラ	科		クマイチゴ (<i>Rubus crataegifolius</i>)	berry	2	9.1	1.5	13.7						
					ベニバナイチゴ (<i>Rubus vernus</i>)	"	1	4.5	4.0	18.0						
					キイチゴ属 sp. (<i>Rubus</i> sp.)	"	1	4.5	2.0	9.0						
					チングルマ (<i>Geum pentapetaium</i>)	leaf	2	9.1	1.5	13.7						
草	本	類														
	ユ	リ	科		キヌガサソウ (<i>Paris japonica</i>)	leaf	1	4.5	2.0	9.0						
					コバイケイソウ (<i>Veratrum stamineum</i>)	"	1	4.5	1.0	4.5						
	メ	ギ	科		サンカヨウ (<i>Diphylleia grayi</i>)	leaf, berry	3	13.6	2.3	31.3						
	ユ	キ	ノ	シ	タ	科										
					クロクモソウ (<i>Saxifraga fusca</i>)	leaf	1	4.5	1.0	4.5						
	キ	ン	ボ	ウ	ゲ	科	sp.									
					(<i>Ranunculaceae</i> sp.)	"	1	4.5	4.0	18.0						
	不	明	sp.		unknown		11	50.0	3.5	175.0						
	イ	ネ	・	カ	ヤ	ツ	リ	ガ	サ	科	sp.					
					(<i>Poaceae</i> or <i>Cyperaceae</i> sp.)	leaf	19	86.4	2.1	181.0						
シ	ダ	類			シノブカグマ (<i>Arachniodes mutica</i>)	leaflet	1	4.5	1.0	4.5						
コ	ケ	類	sp.				4	18.2	1.0	18.2						
地	衣	類			ハナゴケ (<i>Cladonia rangiferina</i>)		1	4.5	1.0	4.5						

1) 容量指数 1: 0-25%, 2: 25-50%, 3: 50-75%, 4: 75-100%
 2) 選択指数 = 出現頻度(%) × 容量指数

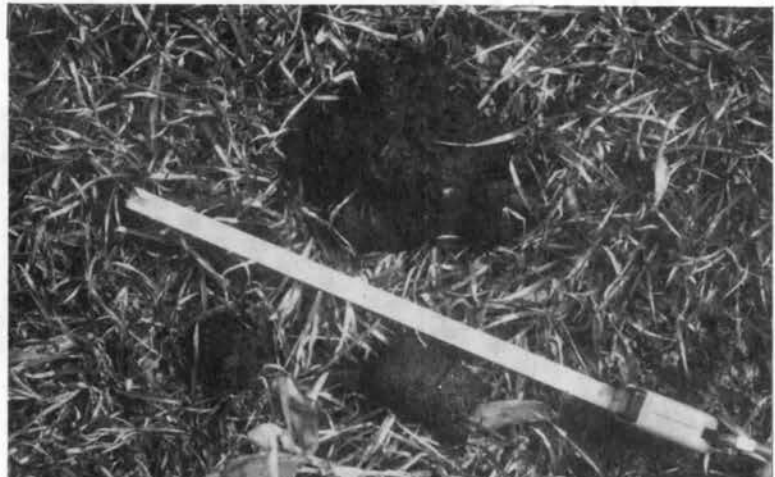
高山帯で採集されたツキノワグマのフン内容物 高山県ライチョウ調査報告書(1988)より

りという食物が毎年実る
 秋にかけて越冬に備えた
 が、長い歴史の中で人間
 によっていろいろに利用
 されてきた山では、食物
 をクマへ提供する植物の
 種類も減りがちだ。およ
 そのところ、こうした地
 域でクマがもつとも利用
 しているのは、ブナ、ミ
 ズナラといった種類の堅
 果(ドングリ)である。
 ところが、こうした広葉
 樹の林はかつては薪炭林
 として利用され維持され
 てきたが、今ではスギや
 ヒノキの人工造林地にど
 んどん作り替えられてし
 まった。したがって、そ
 の絶対量が減少し続けて
 きたのである。そのうえ、
 こうした地域のクマにと
 って厳しいのは、ドング

の依存性を強くしてきたおかげだともいえる。
 そこがクマという動物のひとつの特徴である。
 日本という狭い島国でツキノワグマが暖温帯
 から高山帯まで分布しているとしてみても、本来
 不思議なことではなく、ツキノワグマとはそ
 ういう柔軟な適応力を持った動物なのである。
 同じアルプスに生息するクマでも、山麓に
 暮らすクマにとつては、
 少々棲みにくい世の中に
 なってしまったようだ。
 高山帯と違って山地帯
 のクマは夏の終わりから
 秋にかけて越冬に備えた
 喰いだめをする。ところ
 が、長い歴史の中で人間
 によっていろいろに利用
 されてきた山では、食物
 をクマへ提供する植物の
 種類も減りがちだ。およ
 そのところ、こうした地
 域でクマがもつとも利用
 しているのは、ブナ、ミ
 ズナラといった種類の堅
 果(ドングリ)である。

安定したものではないということである。
 自分の通常の生活範囲(行動圏)の中で
 腹が満たされなければ、うんと速くでも
 食物を求めて移動していかなくてはなら
 ない。そしてその移動の過程でおいしい
 畑の作物に遭遇すれば、腹を満たすため
 に手を出してしまう。そうならば、犯罪
 者として一気には駆除の対象となっていく
 のである。クマのように人身事故を発生
 させる可能性を持った動物では、姿を見
 られただけで追いかけて回され、命を落と
 す。
 こうした厳しい条件の下で暮らすクマ
 のためには、ある植物種の結実が不足し
 ても、他の種で補えるという環境が
 望ましい。そうした生息環境をあちこち
 に確保してやらなければならない。この
 ことは、自然というものが生物種の多様
 性によって保たれ、その多様性のレベル
 が大切であることを教えてくれる。

おわりに
 平和に暮らすアルプスのクマ達も山小屋の
 生ゴミに引き寄せられ、箱などで駆除される
 憂き目に会っていると聞く。本来クマの生息
 地域の真中に、十分に処理しない生ゴミを放
 置すれば、クマは次から次へと際限無くやっ
 てくる。それが雑食性を獲得したクマの習性
 というものだ。が、それを登山客にとつて危
 険だからという理由で駆除しているとしたら、
 自然に対してあまりにも礼儀を欠いてはいな
 いだろうか。アルプスの稜線でもホテルなみの
 暮らしができる時代になったことをとやかく
 言うつもりはないが、ヘリコプターで荷を上



ツキノワグマのフン

げたら、掃りのヘリには生ゴミをすべて乗せ
 て下界へ戻していただきたい。それが山を使
 わせてもらう者の最低限のルールではなかろ
 うか。そうでもなければ、クマのような大型
 で人から猛獣として扱われる動物は、あつと
 いう間にいなくなってしまうのである。動物
 生態学をかじったはしくれとして、そのこと
 を強くお願いしたい。自分自身の厳重な管理
 ができなくて、山を楽しんだり、物知り顔で
 山を語る資格は決してないというものだ。
 (株)野生動物保護管理事務所・代表)

の依存性を強くしてきたおかげだともいえる。
 そこがクマという動物のひとつの特徴である。
 日本という狭い島国でツキノワグマが暖温帯
 から高山帯まで分布しているとしてみても、本来
 不思議なことではなく、ツキノワグマとはそ
 ういう柔軟な適応力を持った動物なのである。
 同じアルプスに生息するクマでも、山麓に
 暮らすクマにとつては、
 少々棲みにくい世の中に
 なってしまったようだ。
 高山帯と違って山地帯
 のクマは夏の終わりから
 秋にかけて越冬に備えた
 喰いだめをする。ところ
 が、長い歴史の中で人間
 によっていろいろに利用
 されてきた山では、食物
 をクマへ提供する植物の
 種類も減りがちだ。およ
 そのところ、こうした地
 域でクマがもつとも利用
 しているのは、ブナ、ミ
 ズナラといった種類の堅
 果(ドングリ)である。

結実変動とクマ

至高の安らぎを作る(下)

吉田喜義さん、テント作りの思い出

アンナプルナのナイロンテント

吉田 京大の藤平正夫さんたちがアンナプルナIV峰に行った昭和28年といえば、ナイロンができて間もないころなんですね。今考えたらナイロンの高所用テントに防水は必要ないんですけれど、当時は軽さと強さに加えて防水ということが必ず頭にあつた。ナイロンはどうしても普通の防水が効かないんで、樹脂加工したものが非常によくあつた。アンナプルナに持っていかれたんで、

ところが新聞見ると、テントが裂けた、飛んだとある。キャラバン中には非常に快適だったけど、上に行つてみるとテントがまた裂けた、また裂けた、飛んでしまつて支柱しか残つていないという記事を見て、もう気が気じゃなかつたですね。というのも普通のテントの生地ならピニオン系の30番で縫うんですが、あまりに薄い生地なので、それより細い40番で縫つたんです。そのために破れたのかと、ほんとうに心配しました。

帰国した藤平さんにさつそく会つてお聞きしましたら、あれはしようがない、生地が弱かつたよとおっしゃいました。なるほど、うちに残つていた生地を引っぱつてみると、ピットと切れるんですね。樹脂加工する時、熱処理が強すぎてナイロンが弱つていたんです。テント屋の責任でないことがわかり、ほつとしました。

冬富士に登る

吉田 昭和28年ころ、谷口さんの紹介でした

か好日山荘の海野治良さんに初めて会つたんです。吉田、こつちへも卸さないかと言うんで、イワタさんとか好日山荘とかに卸すようになりまして。ところが、海野さんは相当な登山の経験者ですから、ひとつの形というものを保持している。私は私で職人の気質があるから、なかなかうまく合わないことがある。こういうのを頼む、いやだめです、それでも作れ、そんなものなら作らない、とケンカしまして、じゃあもうやめたと行かないでいると、半年ほどして、どうだたまには寄れよと声がかかつて、また通うということをして、4回繰り返したことがあるんです。そんな海野さんからカマボコ型テントの話が出ました。

昭和29年でしたか、福岡山の会がヒマラヤに行くということで、海野さんを通して注文がきた。従来のカマボコ型は風に弱くから、天井と両側面に棟を張つてとめてしまえば丈夫になるだろう、そういうテントを作れと言うんです。カマボコが動くのはしょうがない、あれに棟をつけたら生地が破れちゃうからだめだ、そんなことはない、いやだめだ、またさんざん議論したあげく、筋交いを3本入れて補強したテントを一応作つた。ところが、そのテントの試験にお前も富士山に行けと言うんです。もう40歳過ぎてましたし、富士山に登つたことなどないし、まして1月でしよう、行けっこない。それが高橋照さんが、俺の山内のピッケルと、アイゼンを貸してやるからと言うし、何人もついて行くし、荷物は

持たせないからと口説かれて、確か1月11日でしたか、富士山に登つたんですよ。

2合目のスキー場までバスで行つて、それから夏のバス道を歩いたわけですが、学生がこの荷物をとりに下つてくるから、お前これを背負っていけと3貫目(約11kg)くらいのを荷を与えられた。約束がちがうじゃないか、いや学生が来ないからしょうがないと。パイットの学生はバス道ではないほうから迎えに来たらしいんです。5合目の佐藤小屋まで骨折つて行きまして、そこで泊まって、やつと会つた学生に荷を渡して、今度は高橋さんが貸してくれたピッケルとアイゼンを使う段になりました。ところがアイゼンは1度焼けたものだというんですよ。すぐに爪が曲がっちゃうので、ピッケルでひっぱりたいで直しては歩いた。アイゼンがこの調子のところへきて、ピッケルのシャフトもちよつとした拍子でバキンと折れてしまつたんです。もういやだ、やめたやめたと言つたら、ミカン箱をこわして添え木をしてくれて、なだめすかされて頂上までたどり着きました。

冬山の経験などない私は、もう頭が痛くて痛くてどうしようもないんです。それで、お前テント屋だからテント張れつて言われて、風速29mの中で張つて寝たんですよ。テント屋がいれば安心だと皆はいい気持ちで寝ちゃうので、こつちは風が恐くて何度も起きて口を張つて歩いて一晩中寝られませんでした。こうして試してみても、結果的にだめだと海野さんに承知してもらいました。後にも先にも冬山はこれきりですが、テントがいかに大事か身にしみて感じました。

初の新スリング

吉田 大正12年に横さんが退院のあいさつに

水野商店に見えられた話はしましたが、それから2ヶ月ほどして、佐藤久一朗さんがボロボロになつたキスリングを持ってきました。これは非常に背負いやすいんだ、水野これと同じものを作れと言うんです。

当時はテント屋で革製品を扱える店はなかつた。ところが水野が恵まれていたことには、すぐそばに白幡馬具製作所という、陸軍の兵器工廠に馬具の革を納めている革屋さんがあつたんです。キスリングには丈夫なよい革が必要なので、お前行ってこいということで、すぐに見本のザックを見せて頼み込んだところ、気難しいオヤジさんが気持ちよく受けてくれて、加工まで全部やつてくれました。金具も京橋に中村助次郎さんという馬具屋さんがいたので間にあつたわけです。こうして揃つた材料で立派なキスリングを作つたのが、鈴木寅吉という腕のいい先輩の職人さんなんです。佐藤さんもこれはいいと、大変気に入つてくれました。私もそれから少しずつ覚えて作るようになったんですが、鈴木さんの作つたキスリングが国産第一号だと思つています。

(筆写・構成 峯村)

博物館だより

展示改修工事のため現在閉館中です。

◎平成5年3月2日オープンします。◎

山と博物館第38巻第2号

発行所 一九九三年二月二十五日発行
〒388 長野県大町市 TEL 026-221-1111
印刷所 大町 山岳博物館
長野県大町市後町 大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、二〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号(長野四一三三一九三)